The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動詞の第二中止形の意味と機能 ： 姿勢変化動詞の分析
Author(s)	森田, 耕平
Citation	阪大日本語研究. 2016, 28, p. 23-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55455
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』28（2016）

動詞の第二中止形の意味と機能
―姿勢変化動詞の分析―

Meanings and functions of the second non-finite form of verbs: An analysis of verbs which express change in posture

森田 耕平
MORITA Kohei

キーワード：第二中止形、定形動詞、アスペクト、動詞のタイプ、意図的準備性

要旨

本稿は動詞の第二中止形（シテ）が姿勢変化動詞の文を分析し、以下の点を明らかにした。

①シテは、シテがかかる動詞述語が表す主要な出来事と同時的に存在する、主体の結果状態を表す。主体の結果状態は、主要な出来事のために意図的に準備されたものである場合と、意図的に準備されたものではなく付随的な場合がある。この異なりは、典型的には、シテがかかる終止の位置の動詞述語（定形動詞）のアスペクトを完成相にした際に、主体の動作の先行性が前面化するか否かと相関する。

②シテがかかる動詞述語が表す主要な出来事に対して、シテは「動作の姿勢」「動作の場所」「主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態」といった関係的意味を表す。これらの関係的意味は連続的であり、シテのタイプやシテとニ格名詞の結びつき、シテがかかる動詞述語の特徴などから文法的に記述できる。

②関係的意味の違いがシテの機能の違いを示している。付随的な主体の結果状態を表す場合は修飾語的機能を持つが、意図的に準備された主体の結果状態として「動作の場所」を表す場合は状況語的機能を持つ。

1. はじめに

筆者は、動詞の第二中止形（以下シテと表す）が用いられる文を対象に、副次的な動詞述語であるシテが表す出来事と、シテがかかる主要な動詞述語が表す出来事との関係を、これら二つの動詞を中心とした文の文法的特徴に基づいて体系的に記述することを目指す。本稿では次のような場合について記述する。

（1）釣りの男は風のこない二段目の堤防に<u>すわって</u>のんびり煙草を**ふかしていた**。（岳物語009）

（2）男は<u>目を伏せて</u>煙草を**吸っていた**。（離宮の003）

例（1）「すわって」と例（2）「目を伏せて」は、どちらも主体の身体における変化の結果状態を表す。しかしシテがかかる動詞のアスペクトを継続相から完成相にした場合、「堤防にすわって煙草を**ふかした**」ではシテが表す動作の先行性が出てくるのに対し、「目を伏せて煙草を**吸った**」では動作の先行性が明確でないという違いがある。奥田（1989）、仁田（1995）といった先行研究では、二つの出来事の時間的関係の異なりを意味記述に含めているが、それがどのような条件で生じるのか、特にシテがかかる動詞との関係は明らかでない。また例（1）はシテが「堤防に」というニ格名詞をとり、これを場所のデ格名詞で「堤防で煙草を**ふかしていた**」と言い換えてもよいが、「岩にすわって」の場合にはデ格名詞では言い換えられない。奥田（1989）は例（1）のような場合を「主要な動作が実現する空間」を表す場合とするが、ニ格名詞のタイプについては論じておらず、さらに詳しく記述する必要がある。そこで本稿は、以下のような範囲・目的・アプローチにおいて、シテの意味・機能を記述する。

範囲：主体変化動詞のうち姿勢変化動詞を主に扱う。姿勢変化動詞は、「座る、立つ」などの自動詞と、「目を伏せる、腰を下ろす」などの他動詞（主体動作客体変化動詞）の再帰構造による、主体の身体の全体・部分における向き・位置などの外見的変化を表す動詞とする。また「行く、出る」などの位置変化動詞も姿勢変化動詞との関連で扱う。

目的：シテの関係的意味を文法的特徴から記述し、連続的に位置づける。また修飾語らしさや状況語らしさといった、シテの機能的側面についても考察する。

アプローチ：文の主要な述語に対して中止形が常に副次的な関係にあることを念頭に置く。従来の研究のようにシテの側からのみの意味解釈ではなく、シテがかかる動詞述語のアスペクトや、二つの動詞と名詞との結びつきといった、二つの動詞の関係を踏まえた文法的特徴によって、明示的な記述を行なう。

中止形、定形動詞、関係的意味等の用語、主体変化動詞等の動詞分類については2.1節、先行研究の問題点については2.2節、分析の対象については2.3節で詳述する。そして3節で用例を分析し、4節では記述を整理したうえでシテの機能面について考察する。

2. 本稿の立場と先行研究

用例の具体的分析に先立って、本稿の立場・用語と先行研究について概観しておく。

2.1. 本稿の立場

本稿で用いる用語を示す。動詞の中止形は、文中にあって叙述をいったん中止して続けるという構文論的機能を持ち、形態論的にテンス・ムードを表し分けず、他の連用的従属形式の持つ特別な意味（シナガラの同時性、シテカラの継起性など）を表さないシ、シテといった動詞の諸形式である（サセ・サセテ、シテオリ・シテイテ、セズ（ニ）・シナイデ・シナクテなどの形式も含む）。一方、典型的には文末に位置して文を言い切り、テンス・ムードを形態論的に表し分ける動詞形式を定形動詞と呼ぶ。このような立場は基本的に奥田（1984，1989）に従う。

シテの関係的意味という用語は、「定形動詞が表す出来事に対しての従属的で副次的な意味」という意味で用いる。例えば「男は座って本を**読んだ**」という文では、シテは「座る」という動詞が表す主体の意志的動作としての姿勢変化だけでなく、主要な動作（「読んだ」）を行なう際の「姿勢」をも表す。また、動作の先行・結果状態の同時存在といった二つの出来事の間の時間的関係も認められる。これも関係的意味の一つの重要な側面として考える。

分析は、工藤（1995）の以下のようなアスペクト的特徴に対応した動詞分類に従って進める。工藤（1995）では出来事の時間的関係が動詞のアスペクトによって表し分けられることが指摘されている。完成相のスル・シタは継起性の中に、継続相のシテイル・シテイタは同時性の中に出来事を配置するために用いられる。これらの分類に基づいて動詞の語彙・文法的な性質を取り出し、シテと定形動詞のアスペクトによる複数の出来事の時間的関係の構成に注目する。

［工藤（1995）の動詞分類（工藤1995：69-71から筆者によるまとめ）］
（A）外的運動動詞：アスペクト対立あり
　①主体動作客体変化動詞（開ける、切る、のせる、外す、殺す、食べる、見る、読む）
　②主体変化動詞（座る、行く、持つ、死ぬ、枯れる、腐る、結婚する、卒業する）
　③主体動作動詞（たたく、回す、投げる、歩く、遊ぶ、動く、輝く、降る）
（B）内的情態動詞（思う、望む、苦しむ、驚く）：アスペクト対立あるが人称性による変容あり
（C）静態動詞（ある、いる、異なる、甘すぎる、優れている、そびえている）：アスペクト対立なし

森田（2015）は外的運動動詞のうち主体動作客体変化動詞（上記工藤1995の分類A①）について分析し、以下の点を記述した。本稿ではこれに続き主体変化動詞（同A②）を分析する。

①二つの出来事の時間的関係には定形動詞のアスペクトが関わる。定形動詞が（a）完成相であればシテが表す動作の先行性が前面化し、（a’）継続相であれば動作の先行性は前面化しない。

②（a）（a'）のいずれにおいてもシテは主要な動作と同時的に存在する客体の結果状態を表す。客体の結果状態は主要な動作を行なうために必要なものとして意図的に準備されるものであり、主体動作客体変化動詞という動詞のタイプに共通した意味的特徴である。

（a）彼は窓を開けて空を**見た**[1)]。　［客体の結果状態の同時存在＋主体の動作の先行］
（a'）彼は窓を開けて空を**見ていた**。［客体の結果状態の同時存在］

主体変化動詞については工藤（1995）の次のような下位分類と定義に従う。本稿が主な対象とする姿勢変化動詞は下記の□である（□は筆者が付した）。

［主体変化動詞の下位タイプ（工藤1995：74-75から筆者によるまとめ）］
①主体変化・主体動作動詞［再帰動詞］
・かぶる、きる、ぬぐ、はく／おぶう、かかえる、かつぐ、だく、つかむ、もつ
②人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞［自動詞］
・あがる、あつまる、いく、うつる、かえる、かくれる、くる、でる、はいる、もどる、よる
・かがむ、こしかける、しがみつく、しゃがむ、すわる、たちどまる、たつ、のる、ねころぶ
・（人の社会的な変化）結婚する、就職する、卒業する、入院する、離婚する
③ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞［自動詞］
・あたたまる、うれる、おれる、かわく／うまる、かくれる、かさなる、さがる、たつ／おちる、ちぎれる、とれる、ぬける、はなれる／あがる、あつまる、うつる、でる／あらわれる、できる

［主体変化動詞の定義（工藤1995：83）］
（A・2）主体変化動詞は、主体の変化の側面を前面化して、あるいは、主体の変化の側面のみを、とらえているものである。
人が自らを変化させるべく行なう能動的・意志的動作をとらえている、①②のような動詞グループと、ものの受動的変化をとらえている③のような動詞グループに下位分類される。①②の動詞の方は、人の意志的動作を含んでいる点で、（A・1）の主体動作・客体変化動詞に、より近い。③の動詞には、主体の意志的動作の側面はなく、主体動作・客体変化動詞（他動詞）に対応する自動詞は、すべて、この③に所属することになる。

出来事の時間的関係と定形動詞のアスペクトとの関わり、姿勢変化動詞のさらなる分類につ

いては3.1節で詳述する。

2.2. 先行研究

シテの意味関係を体系的に記述した先行研究として奥田（1989）と仁田（1995）を紹介する。

奥田（1989）は主語が一つで動詞が二つの「ふたまた述語文」における、副次的な動作と主要な動作の「複合」を中心に、シテの意味関係を体系的に記述する。「複合」という従属的関係は、シテが動作性を失って一つの動作の特徴づけに移行する場合と、二つの動作の並列の場合の二方向に展開する。以下、奥田（1989）の例も挙げながら、重要な指摘を整理して示す。

①二つの出来事の関係にとって時間的関係は一側面にすぎない。「複合」はこれを包含した概念である。また二つの出来事に時間的関係が認められない場合もある（奥田1989：19-20）。

②副次的な動作と主要な動作との継起的複合の場合に、シテが移動性の動作を表す動詞および「たつ、すわる」のような動詞で「主要な動作が実現する空間」を表す場合がある。（同：21-22）。

・仕方がないので、洗面所にたどりついて、水道栓をひねってみた。

［移動性の動作を表す動詞］

・稜線の頂にたって、後方を展望すると、（後略）　［「たつ、すわる」のような動詞］

③「ふるまい動詞」は「ふるまい状態」と主要な動作との同時的複合を表すが、一方で「ふるまい動作」と主要な動作との継起的複合を表すこともある（同：26-28）。

・里子が道ばたにしゃがんで、近所の女の子たちのままごとをながめていた。

［ふるまい状態との複合］

・一度たって、夕刊と老眼鏡とをもってきた。　［ふるまい動作との複合］

④シテが主要な一つの動作のあり方・様態の特徴づけに移行した場合に、シテが「心理活動に付随しておこってくる表情やみぶり」を表す場合がある（同：29-32）。

・しかし、信吾は胸をのりだして、小川のこちら岸の篠竹のあいだを、目でさがしてみた。

奥田（1989）の記述について検討すべき点は主に二点ある。第一に、取り出したタイプとその相互関係の法則的説明。例えば上記③の「ふるまい状態」と「ふるまい動作」の違いについての、「《ふるまい状態》と動作との複合のばあいでは、ふるまい動詞は動作性をきりすてながら、たんなる状態をさしだしているにすぎないが、継起的におこってくる、ふたつの動作の複合の場合では、ふるまい動詞の動作性が前面にでてきて、結果性がふくみとして表現されている（同：28）」といった指摘は重要である。しかし、その違いの文法的条件は明らかではな

い。②と③、③と④の関係についても同様である。第二に、「複合」という総合的概念の具体化。「複合」は、多様なタイプの動詞による、主要な出来事と副次的な出来事とのひとまとまり性を示す。筆者なりにシテの関係的意味を総合化していくにあたり、次のようにシテが表す動作の結果状態によって主要な動作とのひとまとまり性が生じるという指摘に注目して分析を進める[2)]。

> ふたつの動作が第二なかどめでむすばれて、ひとつの複合動作をかたちづくっているとき、おおくのばあい、ふたつの動作のあいだに先行・後続の時間的な関係がみられる。定形動詞によってさしだされる、主要な動作が実現するにあたって、まえもって用意しておかなければならない状態が、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作によって実現されるのである。したがって、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作は、定形動詞によってさしだされる動作との関係において、かならず先行していなければならない。そして、この動作は完結して、結果的な状態をのこしていて、それが主要な動作の実現のための条件としてはたらいている。ここでは、第二なかどめの動詞はパーフェクト性をおびているのである。この意味で、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作は、主要な動作に先行する、副次的な動作としてあらわれながら、ふたつの動作のひとまとまり性が生じてくる。つまり、第二なかどめの動詞がふくみとしてさしだす≪状態≫のなかでのみ、定形動詞によってさしだされる動作は進行することができる。
>
> （奥田1989：20、波線は筆者）

仁田（1995）は、シテによる意味関係を「付帯状態」「継起（時間的・起因的）」「並列」に整理して記述する。これは性質の異なるシテをA～C類に振り分けた南（1993）の従属句分類とも対応しており、「付帯状態」は主節への従属度が最も高く「並列」は最も低い。「付帯状態」は二つの事象の主体が同一で、「主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾する、といったあり方で、主節と結び付いている」とされ、主要な事象との同時性によって「継起」と区別される。シテが姿勢変化動詞の場合は「付帯状態」の「姿勢」として下位分類されている。

しかし用例を詳しく観察すると、この「付帯状態」「継起」の区別に疑問が生じる。「付帯状態」には容易に「継起」的になるものがある。例えば仁田（1995：93）の「<u>踞(しゃが)んで</u>見ていた」を「<u>踞んで</u>見た」にした場合、定形動詞のアスペクトによって「付帯状態」と「継起」が異なる可能性があるが、言及はない[3)]。そもそも、「<u>踞んで</u>**見ていた**」と「<u>踞んで</u>**見た**」では動詞の組み合わせが同じであり、出来事の実現のされ方の限定・修飾という関係は継起的であっても変わらない。つまり共通の意味関係があり、時間的関係による「付帯状態」か「継起」かの区別は二次的なものであって、別のカテゴリーに分類することは不自然なのではないか。

また仁田（1995）の「付帯状態」には結果状態だけでなく動作や心理的状態などの下位類があるが、検討されていない場合もある。例えば「李先生は、気が向けば台所へ入って庖丁をふるう」は「継起」の例（同：105）だが、主要な事象の限定・修飾という「付帯状態」的側面が全くないと言えるのか。「台所に立って包丁をふるう」のように「姿勢」を表す場合との連続性を考慮すると、「継起」性以外にも記述すべき関係があるのではないか。本稿の目的は仁田（1995）の分類の精密化ではないが、再度多様な意味関係を観察したうえで、カテゴリーの立て方や「付帯状態」が最も従属度が高いという機能的な位置づけを検討する必要があるように思われる。この点は仁田（1995）に先行して「様態動詞」のシテを分析した成田（1983）、仁田（1995）と同様の「付帯（状況）」「継起」などの分類に基づいてシテについて分析する内丸（2006）、吉永（2008）、三原（2011）、吉田（2012）などにおいても同様である。

2.3. 分析の方法と対象

本稿の分析の対象は、現代日本語で書かれた小説から収集した実例である。用例は次の範囲から手作業で収集した。②の範囲で用例を収集した作品には、いったん①の範囲で収集したうえで同じ作品について②の範囲に広げて収集したものもある。

①短編を含む文庫本収録作品の地の文と会話文について、すべての形式の中止形の用例を冒頭から150例の範囲で収集し、そこから抜き出した［シテ＋定形動詞が継続相］の例（150例×32冊＝4800例中、150例程度）
②作品全体から収集した［シテ＋定形動詞が継続相］の例（20冊700例程度）

本稿が分析対象とする文の特徴について、対象外とする場合とともに示す。

	分析対象	分析対象としない場合
第二中止形の形式	**シテ**	シテイテ、サレテ、サセテ、シナイデなどの文法的有標形式
定形動詞の位置	**終止の位置**	非終止の位置（連体形、連用的従属形式）
定形動詞の文法的意味	**アスペクト**	ヴォイス、否定、ムード、モダリティ（ノダ以外）など
定形動詞のアスペクト的意味	**動作継続** **結果継続**	恒常的な特性、ものの配置、反復習慣、パーフェクト
主体の同一性	**同一主体**	異主体
シテ（主体変化動詞）の下位タイプ	**姿勢変化動詞** **位置変化動詞**	主体変化・主体動作動詞（2.1節の工藤1995の分類①） ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞（2.1節の工藤1995の分類③）

本稿が対象とするのは「～が（は）＋シテ＋シテイル（シテイタ）。」という構造の文（上記①と②の計約850例のうち約250例）である。このような例に注目するのは、最も単純な形で、二つの動詞が表す出来事の関係を取り出すためである。定形動詞のアスペクトに注目するのは、出来事の時間的関係を分析するうえで、完成相と継続相の基本的なアスペクト対立が成り立つのが動詞述語が終止の位置にある場合であり、この場合をまず記述すべき中心的なものと考えるからである。同一主体の場合に注目するのは、一つの主体のもとでシテが定形動詞との関係において示す副次的な意味・機能を明らかにするためである（「彼は椅子に座って、私は本を**読んでいた**」のような異主体の文では、シテの副次性はとらえにくい）。

しかし、複数の述語が表す出来事の関係の総合的記述にあたっては、シテがかかる動詞が非終止の位置にあって三つ以上の出来事が関係する場合や、二つの動詞のアスペクト以外の文法的有標形式の考察も避けて通ることはできない。また並列関係や条件関係（原因・理由、譲歩）なども関係的意味として体系化し、単文・複文といった文の構造的なタイプについても論じるためには、異主体の文も切り捨ててしまうわけにはいかない。しかし、これら複雑なケースについては、二つの動詞の関係の多様さを整理しきれていない今の筆者には、分析の手が及ばない。今後、段階的な整理を経て、改めて分析・記述することとしたい。

なお、主体変化動詞のうち対象外にするものについて以下の点を述べておく。第一に、「着る、持つ」などの主体変化・主体動作動詞の場合は、人の意志的な動作を含む点で姿勢変化動詞と共通するが、他動詞であるため主体動作客体変化動詞との共通性もある。また「彼は浴衣を着て、帯を**締めている**」のように同種の出来事が並列される例が多く見られる点でも、姿勢変化動詞と異なる傾向を示している。第二に、ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞による「花びらが落ちて、雨で**濡れていた**」のような場合は、①主要な動作の姿勢や場所といった関係的意味のバリエーションが出てきにくく、②主体の結果状態が意図的に準備されるかどうかは問題にならない（「花びらが落ちて、雨で**濡れた**」のような場合は結果状態の意図的準備性に基づかない出来事の連鎖である）点で、人の意志的な変化を表す動詞とは異なる。

3. 用例の分析

本節では、まず分類の基準となる文法的特徴を確認する（3.1節）。そのうえで用例を意図的に準備された主体の結果状態を表す場合（3.2節）と付随的な主体の結果状態を表す場合（3.3節）に大きく分け、さらにそれぞれを下位分類する。

3.1. 分類の基準の確認

用例の詳しい分類のための基準となる文法的特徴として、以下、定形動詞のアスペクトとシテの動詞のタイプの異なりについて確認する。

まず、定形動詞のアスペクトによって、シテと定形動詞が表す二つの出来事の間の時間的関係が異なる場合がある。例（3）（ア）の「立って」ではシテが表す動作の先行性が認められるのに対し、（イ）の「立って」では、動作の先行性は表現されていない。

（3）僕はなんとなく不安になって、洗面所まで行った。洗面所のドアは開けはなしになっていた。（ア）僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めた**。（イ）彼女は青い無地のパジャマに着替え、鏡の前に立ってタオルで髪を**拭いていた**。（ねじま 123）

つまり、定形動詞のアスペクトが（b）完成相か（b’）継続相であるかが、主体の動作の先行性が前面化するか否かに対応している。一方で、（c）（c’）のように定形動詞のアスペクトが違っても、（b）（b’）ほど主体の動作の先行性による違いが明確でない場合もある。

（b）僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めた**。　［定形動詞＝完成相］
（b’）僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めていた**。　［定形動詞＝継続相］
（c）僕はぽかんと口を開けて妻のうしろ姿を**眺めた**。　［定形動詞＝完成相］
（c’）僕はぽかんと口を開けて妻のうしろ姿を**眺めていた**。［定形動詞＝継続相］

重要なのは次の二点である。第一に、どの場合でも、主体における変化の結果状態が主要な動作と同時的に存在している。この特徴は多くの場合、姿勢変化動詞というタイプに共通する。「一度立って、今は**座っている**」のように同時に存在しえない結果状態の並列の場合については 3.2.4 節で触れる。第二に、（b）で動作の先行性が前面化するのは、動作によって生じる結果状態が主要な動作のために意図的に準備されるという関係があるからである。（c）の「口を開けて」は、主要な動作のために準備されたものであるとは考えにくい。つまり（b）と（c）は主体の結果状態が主要な動作のために準備されたものかどうかで異なる。このように、アスペクトによって動作の先行性が前面化するか否かに基づいて、意図的に準備された主体の結果状態を表す場合と付随的な主体の結果状態を表す場合を分ける。

次に、詳しく関係的意味を分析するために、シテの動詞のタイプを下位分類する。姿勢変化動詞として、2.1 節で示した工藤（1995）の主体変化動詞分類の②人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞、「かがむ、こしかける」などの自動詞とともに、「腰を下ろす、目を開ける」のよう

な主体動作客体変化動詞による再帰構造も扱う。このような把握は奥田（1989）の「ふるまい動詞」と基本的に同じである。自動詞には「中腰になる」のような［姿勢を表す状態名詞のニ格＋なる］の場合も含める[4)]。次頁に姿勢変化動詞および位置変化動詞のリストを示す。それぞれのタイプが3.2節以降の分析のどこで主に扱われるかも示している。

姿勢変化動詞を自動詞と再帰構造だけでなくニ格名詞の有無によっても分けるのは、シテが「立つ、座る」「腰を下ろす、身を起こす」のような動詞で、ニ格名詞をともなって「動作の場所」を表す場合を取り出すためである。この特徴は位置変化動詞との共通性を示す。再帰構造を身体の部分（体幹・四肢・頭部）で分けるのは、主体の内的側面の表れとしての身体の様態を表す場合が、「頬をゆるめる、目を伏せる」のように頭部の場合に多く見られるからである。

自動詞は「立ちつくす、へたりこむ」「うつむく、うなだれる」のようなものを除いて意図的に準備された主体の結果状態を表す場合が多い。再帰構造は「腰を下ろす、身を起こす」など自動詞の「座る、起き上がる」に相当するものを除いて、付随的な主体の結果状態を表す場合が多い。しかし、シテのタイプのみで関係的意味が分類できるわけではなく、定形動詞が表す出来事との関係を考慮する必要がある。例えばシテが自動詞であっても「しゃがんで**泣いている**」「壁によりかかって**死んでいた**」のように、定形動詞が非意志的な動作や結果状態を表す場合には、シテが意図的に準備された結果状態を表すわけではない。また再帰構造でも「腰を曲げて、**さすっていた**」のように、身体部分が定形動詞の表す出来事の対象でもある場合は、意図的に準備された結果状態を表す。このような場合については3.2.4節で触れる。

3.2. シテが意図的に準備された主体の結果状態を表す場合

本節では、シテが意図的に準備された主体の結果状態を表す場合を下位分類して記述する。同じ姿勢変化動詞でも①と②を分けるのは、②がニ格名詞をともなって動作の場所をも表し、③の位置変化動詞の場合と連続するからである。定形動詞が表す主要な出来事は動作継続の場合と結果継続の場合とがあるが、用例の多かった動作継続の場合をまず確認する。定形動詞が結果継続の場合は3.2.4節で触れる。

①姿勢変化動詞による［姿勢］　　：彼は座って洗濯物を**畳んでいた**。　（3.2.1節）
②姿勢変化動詞による［姿勢と場所］：彼は縁側に座って洗濯物を**畳んでいた**。（3.2.2節）
③位置変化動詞による［場所］　　：彼は縁側に出て洗濯物を**畳んでいた**。　（3.2.3節）

3.2.1. 姿勢変化動詞がニ格名詞をともなわないで動作の姿勢を表す場合

次のような場合、シテは主要な動作を行なうために必要であるか効果的に行なうために意図

［姿勢変化動詞］

自動詞

くっつき先のニ格名詞をとるもの（3.2.1、3.2.2節）

起きる、起き上がる、立つ、立ち上がる、立ち止まる、座る、屈む、しゃがむ、ひざまずく、正座する、うずくまる、寝る、寝ころぶ、たたずむ、立ちつくす、へたりこむ、這いつくばる、倒れる、乗る、のぼる、もたれる、よりかかる、つかまる、すがる、しがみつく、横（棒立ち、つま先立ち、仁王立ち、中腰、立て膝、四つん這い、あお向け、うつぶせ、大の字、馬乗り）になる

くっつき先のニ格名詞をとらないもの（3.2.1、3.3節）

ふりかえる、ふりむく、うつむく、うなだれる、前のめり（猫背）になる

再帰構造（身体部分を表す名詞＋主体動作客体変化動詞）

くっつき先のニ格名詞をとるもの（3.2.1、3.2.2、3.3節）

体幹：腰を下ろす（腰をかける）、身（体）を起こす、身（腰）を屈める、体を沈める、尻をのせる

四肢：手を入れる（おく、のせる）、肘をつく、膝をつく、足をかける（投げ出す）

頭部：額（おでこ）をくっつける、顔をおしあてる、頭を倒す、頬を寄せる、口（唇）をつける

くっつき先のニ格名詞をとらないもの（3.2.1、3.3節）

体幹：身を乗り出す、体を縮める、体をそらす、背中（腰）を丸める、背すじ（腰）を伸ばす

四肢：足（腕）を組む、足（腕、指）をそろえる、足（腕、指）を曲げる、肩を落とす（すぼめる、すくめる）、膝をかかえる、脇をしめる、手をあわせる、手（指）をひらく

頭部：顔をしかめる（伏せる、上げる）、眉を寄せる（ひそめる）、目を開ける（閉じる、伏せる、吊り上げる、細める）、口を開ける（閉める、すぼめる、尖らせる）、頬をゆるめる（ひきしめる、ふくらます）、首を傾げる、あごを突き出す、舌を出す、唇を結ぶ、歯をむき出す

［位置変化動詞］（3.2.3節）

行く、来る、帰る、戻る、引き返す、入る、出る、寄る、着く、回る、移る、隠れる、上がる、下りる

的にとられる姿勢を最も単純に表す。効果的であるというのは、必ずしもそうしなければ主要な動作が実現できないということではなく（例えば屈まずに靴紐をかけることもできる）、ある姿勢をとったほうが動作の対象に近づいたりすることで動作がしやすいということである。なお例（4）～（6）の動詞はニ格名詞をともなえば動作の場所を表しうる。

（4）リツ子も気分がよいのかおき上って窓からしきりに手を**ふっている**。（リツ子023）
（5）成瀬は屈んでワークブーツの靴紐を丁寧に**かけている**。（顔に降151）
（6）森のなかの小さな草地にねころがっていた学生が身を起してこちらを**見ていた**。（煙草001）
（7）沼田は馬車が動き出すと、ふりむいて、自分を追いかけてくるクロを**見つめていた**。（深い河184）

3.2.2. 姿勢変化動詞がくっつき先のニ格名詞をともなって動作の姿勢と場所を表す場合

次のような場合、シテはくっつき先のニ格名詞をともなって全体として動作の場所をも表す。主要な動作は主体がある場所である姿勢をとった状態で行なわれる。シテが「座る（例8、9）、立つ（例10）、寝る（例11）」のような姿勢を表す動詞であり、ニ格名詞が例（8）～（10）のように一定の空間的な広がりをもつ「もの」であるか、例（11）のように形式名詞によって空間化されたものであることが特徴である。

（8）釣りの男は風のこない二段目の堤防にすわってのんびり煙草を**ふかしていた**。（岳物語009、例1再掲）
（9）誰もいない美術館の横のベンチに腰をおろして、田中は晩飯のかわりにハムをはさんだパンを**齧っていた**。（留学022）
（10）渡海千造は、息子の博正と一緒に千歳空港のロビーに立って、平八郎たち一行を**待っていた**。（優駿169）
（11）公平は波子に言われたとおり、座席の下に這いつくばって、両手で頭を**隠していた**。（赤い月191）

場所を表すと言える文法的基準は、［ニ格名詞＋シテ］の部分を場所のデ格名詞で言い換えられることである。デ格名詞の場合は動詞（シテ）と違って、主体がその場所にいることが姿勢変化の結果として示されているわけではない。当然、姿勢の側面も表されない。

（8’）釣りの男は風のこない二段目の堤防でのんびり**煙草をふかしていた**。
（9’）誰もいない美術館の横のベンチで、田中は晩飯のかわりにハムをはさんだパンを**齧っていた**。
（10’）渡海千造は、息子の博正と一緒に千歳空港のロビーで、平八郎たち一行を**待っていた**。
（11’）公平は波子に言われたとおり、座席の下で、両手で頭を**隠していた**。

次の場合はデ格ではなくカラ格名詞のほうが自然である。カラ格名詞は方向性のある動作の起点を表すが、主体が存在して動作を行う場所である点ではデ格名詞の場合と同じである。

（12）ふと気づくと、いつのまに来ていたのか、平八郎が横に坐って（横から）、多田の手にしている手紙に視線を**注いでいた**。（優駿181）

ただしニ格名詞があれば必ず動作の場所を表すわけではなく、デ格名詞で言い換えられない場合がある。例（13）～（15）のニ格名詞は、ある姿勢をとる際の支え（よりどころ）となる、空間的な広がりがない具体物である[5)]。例（15）のように「よる（よりかかる）、もたれる、つかまる、すがる（すがりつく）、はりつく」などの動詞は常にそのようなニ格名詞をともなう。

（13）耕作は、山の上の石に腰をおろして（*山の上の石で）、あたりを**見まわしていた**。（続泥流008）
（14）よろしく頼んで、離れに戻ると、章次は畳に寝そべって（*畳で）写生帖を**めくっていた**。（白夜を171）
（15）友子はけいこ着になっていたが、踊ってはいなかった。バアにもたれて（*バアで）、レコオドを**聞いていた**。（舞姫004）

3.2.3. 位置変化動詞がゆくさきのニ格名詞をともなって動作の場所を表す場合

姿勢変化動詞において「動作の場所」の場合を取り出すことで、同じ主体変化動詞である「行く、来る、出る、入る、着く」といった位置変化動詞も同様の関係的意味を表すことが記述できる。姿勢変化動詞と位置変化動詞は「主体が自らを変化させるべく行なう能動的・意志的動作（工藤1995）」を表す点で共通する。奥田（1989）は移動性の動詞と「立つ、座る」のような動詞が「動作の実現する場所」を表すことを指摘しているが、本稿はデ格名詞による言い換えをその共通・連続性を裏づける文法的特徴としてとらえる。

（16）あの爆発の日、おどは清水の沢の飲み友だちの所に行って（清水の沢の飲み友だちの所で）酒を**飲んでいた**。（続泥流002）
（17）シゲ子は裏手を流れる溝川の洗い場に出て（裏手を流れる溝川の洗い場で）、暗くなったのに洗濯物を**漱いでいた**。（黒い雨031）
（18）我々はバス停に着いて（バス停で）、バスを**待っていた**。（ねじま131）

姿勢変化動詞と位置変化動詞は次の点で異なる。姿勢変化動詞は例（4）～（7）のようにニ格名詞なしでも動作の姿勢を表す場合があるが、位置変化動詞は文脈上省略してもよい場合や「入って来て」「出て行って」のように補助動詞による方向づけがない場合を除けば、基本的にニ格名詞を省くことができない。また姿勢変化動詞は（A）（A’）のようにニ格名詞をそのままデ格名詞にしてもよい。（A）のニ格名詞はシテのみと関係するが、（A’）のデ格名詞は二つの動詞と関係する。一方、位置変化動詞は（B’）のようなデ格名詞での言い換えはできない[6)]。
（A）［縁側に座って］洗濯物を**たたんでいた**。　［くっつき先－姿勢］－**主要な動作**
（A’）縁側で［座って洗濯物を**たたんでいた**］。　場所－［姿勢－**主要な動作**］
（B）［縁側に出て］洗濯物を**たたんでいた**。
（B’）*縁側で出て洗濯物を**たたんでいた**。

また、場所を表すと言っても、姿勢変化動詞の場合のニ格名詞は基本的にくっつき先であって、人がそこに立ったり座ったりすることで存在する相対的に狭い場所である。この点で「日本、村、学校」といった典型的な空間名詞と結びつく位置変化動詞とは異なる[7)]。

なお、上記はゆくさきのニ格（へ格）名詞をともなう位置変化動詞についての分析であるが、複数主体の集合様態を表す「集まる、固まる、別れる」、移動の経路を表すヲ格名詞をともなう「通る、降りる、越える」など、その他のタイプの動詞による場合もある。位置変化動詞を含めたこれらの移動性の動作を表す動詞の総合的記述は今後の課題である[8)]。

3.2.4. その他注意すべき場合

ここまで典型的なタイプを中心に取り上げてきた。ここでは、次節の付随的な身体の結果状態の場合の記述に先立って、中間的なものも含め注意すべき場合を挙げる。

［①定形動詞が結果継続の場合］

定形動詞が結果継続の場合も、次のような例は動作継続と同様に分析できる。例（19）（20）では二つの動詞がいずれも姿勢変化を表しているが、姿勢の単なる並列ではなく、シテは主要

な姿勢をとるための副次的な姿勢を表す。例（21）は主要な出来事としての姿勢をとる場所を、ニ格名詞をともなった位置変化動詞のシテが表している。

（19）なるほど少女は起き上がって、畳の上に**坐っていた**。（夏草下013）
（20）同じころ、長田は新橋駅のベンチに座って**腕組みしていた**。（眠り猫134）
（21）ところが、自分は父の在所の村にきて、こうして湯宿の古畳に**寝そべっている**。（白夜を193）

例（22）（23）のように二つの同種の姿勢変化が並列される場合は、シテが表す主体の結果状態が副次的なものとして定形動詞の出来事と同時的に存在しているわけではない点で、これまで記述した場合と異なる。しかし姿勢の切り替わりや対比を示す表現や文脈の支えがなければ解釈しにくく、また収集した範囲ではこのような例が見られなかった点で、特別なタイプであるように思われる。例（24）の二つの位置変化の並列の場合も同様である。

（22）私は最初は正座して、そのうち足が痛くなったので、あとはあぐらを**かいていた**。
（23）（会議で）発言するために彼は一度立ち上がって、今はずっと**座っている**。
（24）彼は昨日京都に行って、今日は大阪に**戻っていた**。

［②動作の先行性が明確でなく、意図的に準備された結果状態とは言いにくい場合］
3.1節で述べたように、シテが意図的に準備された結果状態を表す場合は、定形動詞が完成相であれば主体の動作の先行性が前面化される。ここまでの例でもこのことが確認できる。

（6’）森のなかの小さな草地にねころがっていた学生が身を起してこちらを**見た**。
（8”）釣りの男は風のない二段目の堤防にすわってのんびり煙草を**ふかした**。
（16’）あの爆発の日、おどは清水の沢の飲み友だちの所に行って酒を**飲んだ**。

シテが姿勢変化動詞の例（3）（ア）（イ）同様、シテが位置変化動詞の例（25）（ウ）（エ）でも一連の文脈の中で定形動詞のアスペクトによる出来事間の時間的関係の異なりが確認できる。

（25）（ウ）少年の一人がその路地の端の溝のところへ行って、そこを**覗き込んでいた**が、
「あった！　これだろう」

他の二人の少年もすぐその方へ移動して行った。そして、そこを覗き込んでいたが、小柄の少年が、
「ここにあらあ、ここにある、ある！」
と言った。（エ）洪作も清吉さんと一緒にそこへ行って、溝を**覗き込んだ**。（夏草冬046）

しかし実例には、必ずしもこのような違いが明確でない場合がある。いずれもシテの結果状態の意図的準備性が動作の先行性とともに薄れていることを確認しておく。

第一に、定形動詞が「ひと」による非意志的な出来事（動作・結果状態）を表す場合。

（26）リツ子の母が起きだしてぶるぶる**ふるえている**。（リツ子001）
（27）頭をもたげて板戸の隙からそっと見ると、耕作がちゃぶ台にうつ伏せになって**眠っていた**。（泥流地158）

この場合、そもそも主要な出来事が非意志的に行なわれるものであり、シテが表す主体の結果状態がそのために意図的に準備されたものとは考えられない。その結果、定形動詞を完成相にした場合は、単に事実の推移として動作の連続を述べているか、主要な動作が意志的に行なわれると解釈できる文脈でないかぎり不自然になる。ただし例（28）のような実例もあり、定形動詞が完成相である場合が全く非文法的であるというわけではない。

（26’）リツ子の母が起きだしてぶるぶる**ふるえる**。
（27’）耕作がちゃぶ台にうつ伏せになって**眠った**。
（28）水田は若い女と温泉宿に行って、そこで**頓死した**。（山の音086）

第二に、「たたずむ、立ちつくす、突っ立つ、へたり込む、棒立ち（仁王立ち）になる」といった動詞は、姿勢のみならず心理・態度的なニュアンスを含む。また「倒れる、しりもちをつく」「はまる、落ちる、沈む」などは意志的な姿勢（位置）変化ではない。シテのタイプからみて、これらの場合は、主体の結果状態の意図的準備性から動作の先行性はとらえられない。この点で付随的な主体の結果状態の場合と近いのだが、異なるのは例（29）（30）のようにニ格名詞をともなって動作の場所をも表しうる点である。

（29）多田もその場に立ちつくして、博正が仔馬に投げかけている言葉を**聞いていた**。（優駿172）

（30）サチはホノルルの日本領事館からその知らせを受け、そのまま床に座り込んでしまった。頭の中ががらんとして、何を考えることもできなかった。ただそこにへたり込んで、目の前の壁の一点を**見つめていた**。（ハナレ012）
（31）相生橋北岸の空鞘町まで行くと、瓦の破片の積み重なっているなかで、二人の女が尻餅をついてしくしく**泣いていた**。（黒い雨032）

第三に、「立つ」という動詞は、「立ち上がる」などと違って姿勢変化を明確に表しておらず、単に主体のある場所での存在を表す場合が多い。

（32）一つはたしか四年生ぐらいの時だったと思うが、掃除当番で四五人の女生徒が放課後に残っていた。バケツや棒雑巾をしまって帰りかかった時のことである。そこにどうして又そんなことが始められていたのかも憶えていない。ともかく同級生の男の子が五六人教壇に立ってズボンを下の方に**おし下げている**。（朱を奪147）

［③主体の身体部分が主要な動作に加わる対象である場合］

シテが付随的な主体の結果状態を表す場合（3.3節）は、多くが再帰構造によるものであるが、再帰構造でも意図的に準備された主体の結果状態を表す場合がある。既に述べたように、身体部分を表すヲ格名詞が体幹（腰、身、体など）であり「腰を下ろす、体を乗り出す」のような場合は、部分というより身体全体に関わって、姿勢そのものを表す（例6、7、9、13）。一方、ヲ格名詞が四肢（腕、手、足など）、頭部（顔、目、口など）の場合は、動作を行なう身体の部分的な特徴であることが多い。しかしそれでも、次のように意図的に準備された結果状態を表す場合がある。収集した限りでは定形動詞が継続相である実例は見られず、例（32）（33）は作例、例（34）は定形動詞が完成相の例である。

（32）彼は台に尻をのせて、辛そうに**さすっていた**。
（33）彼は指で目を開いて、目薬を**さしていた**。
（34）なおもなにか話しかけようとしたとき、男が腕を振りあげて、花の頬を**はたいた**。（私の男329）

これらの文では、身体部分を表す名詞が主要な動作に加わっていく対象であるという特徴がある。それは「尻をさする」「目に目薬をさす」「腕ではたく」という身体部分を表す名詞と定形動詞との格関係によっても確認できる。また定形動詞が完成相であればシテが表す動作の先

行性も明らかである。これらは客体としての身体部分の結果状態という側面が強く、次の例（35）～（37）のように身体部分ではない「もの」を客体とする主体動作客体変化動詞の場合と近い。

（35）彼は台に茶碗をのせて、**さすっていた**。
（36）彼は指で猫の目を開いて、目薬を**さしていた**。
（37）男が新聞紙を振りあげて、花の頬を**はたいた**。

次の例（38）では、シテが表す動作の客体（指）が直接ヲ格やニ格の資格で主要な動作に関わるわけではないが、その部分（爪）が対象として主要な動作に加わっている。逆に、例（39）ではシテが表す動作の客体（指）が、定形動詞が表す動作の客体（手のひら）の部分として、主要な動作に関わっている。つまり、これらはシテが表す動作の客体である身体部分の一部または全部が主要な動作に関わる場合としてまとめられる。

（38）彼女は指を伸ばして爪にマニキュアを**塗っていた**。
（39）彼は指を伸ばして手のひらに雨を**受けていた**。

次の例（40）～（42）のようにシテが表す動作の客体が主要な動作を行なう身体の部分である場合にも、「白い腕で拭く」「そむけた目で見つめる」「とがらした口で云う」という関係がある。しかし規定語なしで「腕で拭く」「目で見つめる」「口で云う」とは普通言えないことから、「腕ではたく」と言える例（34）と違って、主要な動作に加わる対象（道具）らしいとは言えない。身体部分における結果状態は意志的に実現されるが、主体の内的な側面の修飾があれば付随的な主体の結果状態となる、中間的な場合であろう（3.3.2節の例62、63も参照）。

（40）会社の部屋では、夏子が白い腕を出して、窓ガラスを**拭いていた**。（山の音028）
（41）仏壇に並べられた三枚の写真から目をそむけて、僕は壁にくっきりと映った僕らの影**を見つめていた**。（遺影180）
（42）一ツ細目の芋を取り出した。お箸のままフウフウ息をふきかけると、太郎も下で口をとがらしてフウフウと**云っている**。（リツ子021）

3.3. シテが付随的な主体の結果状態を表す場合

シテが付随的な主体の結果状態を表す場合は、いずれも再帰構造が中心に用いられる。しか

し、シテが身体部分の結果状態を表すのみならず、主体の身体部分の結果状態が主要な出来事にともなう内的（態度・心理・生理的）な側面を表す場合が出てくることから、シテが身体部分の単なる結果状態を表す場合（3.3.1節）とシテが主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態を表す場合（3.3.2節）に下位分類して記述する。

3.3.1. シテが身体部分の単なる結果状態を表す場合

例（43）は体幹、例（44）は四肢、例（45）は頭部の例である。体幹や四肢と違い、顔やその部分の場合は「姿勢」というより「表情」である。再帰構造だけでなく例（46）のような「うつむく（うなだれる）」や「前のめり（猫背）になる」などの自動詞の場合もある。

（43）「お店にいると、縫う暇がなくて……」
　　言いながら福子は背すじを伸ばして針を**運んでいた**。（続泥流004）
（44）窓際の席で頬杖をついて、ひろがる氷の色の海を**みつめていた**。（私の男194）
（45）男は目を伏せて煙草を**吸っていた**。（離宮の003、例2再掲）
（46）清海は手に持っていたむきだしの札束を、多田に押しつけた。「これ、星くんから。『清海にエロいことしたら、亀尾川のモクズにするって言っとけ』だって」
　　終わった、と多田は思った。住民たちはうつむいて、タワシで石を**こすっている**。（まほろ190）

定形動詞が動作継続ではなく結果継続の場合も挙げる。例（47）（48）は主要な出来事としての姿勢に対して、シテがその部分における結果状態を表す場合、例（49）（50）は二つの動詞が一人の主体に共存する二つの身体部分における結果状態を表す場合である。

（47）洪作は雨に叩かれたまま、両膝を両手でかかえて、飛込台の上に**うずくまっていた**。（夏草冬040）
（48）子供靴の片方を手に出てきた若い女をみて、仙吉は肝をつぶした。女はまり奴だった。
　　「水田子爵」
　　まり奴も口をあけて**立っていた**。（あ・う031）
（49）一番端の席で佐木多加志が腕組みをして目を**閉じていた**。（優駿182）
（50）みなが殊勝に、目をとじて手を**合わせている**。（橋づく062）

シテがくっつき先のニ格名詞をともなう場合もある。しかしニ格名詞は身体部分が接触して

いる具体物であって動作の行なわれる場所（3.2.2節）ではなく、場所のデ格名詞による言い換えはできない。例（51）は体幹、例（52）（53）は四肢、例（54）は頭部の例である。

（51）窓枠に尻をのせて、淳悟が**座っていた**。（私の男088）
（52）女は手すりに肘を置いて海を**見ていた**。（すいば185）
（53）池はやや日本風で、小さい中の島の燈籠に白人兵が片足をかけて、娼婦と**たわむれていた**。（山の音020）
（54）背中の老婆は、女の肩に頬をつけて目を**閉じていた**。（白夜を168）

姿勢変化動詞は、工藤（1995）が示すように、基本的には主体による意志的な動作としての姿勢変化を表すものである。付随的な主体の結果状態といっても全く非意志的にもたらされるというわけではない。しかし定形動詞が表す出来事との関係から見れば、姿勢の場合（3.2.1、3.2.2節）や身体部分が定形動詞が表す出来事に対象として関わる場合（3.2.4節）と異なって、意図的準備性ははっきりしない。このことは、3.1節で示したように、定形動詞のアスペクトを完成相にしても動作の先行性が明らかでないことから確認できる。先行性があるとしても、どのような意図で結果状態を準備する必要があるのかは明らかではない[9)]。

（43’）言いながら福子は背すじを伸ばして針を**運んだ**。
（44’）窓際の席で頬杖をついて、ひろがる氷の色の海を**みつめた**。
（45’）男は目を伏せて煙草を**吸った**。
（46’）住民たちはうつむいて、タワシで石を**こする**。
（51’）窓枠に尻をのせて、淳悟が**座った**。
（52’）女は手すりに肘を置いて海を**見た**。
（53’）小さい中の島の燈籠に白人兵が片足をかけて、娼婦と**たわむれた**。
（54’）背中の老婆は、女の肩に頬をつけて目を**閉じた**。

3.3.2. シテが主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態を表す場合

実例を観察すると、次の例（55）～（60）のように身体部分の結果状態が主要な出来事にともなう内的（態度・心理・生理的）な側面の現われである場合が多い。このことは修飾語や文脈によって示される。「胸を張る、肩を落とす（すぼめる）、手を合わせる、頭を下げる、舌を出す」のようにフレーズとして心理・態度的な意味を持つ場合もある。このような場合では、シテの関係的意味は具体的なものから抽象的なものに移行しつつある。

（55）父親の姿はベンチになかった。怪訝に思って周囲を見回すと、宝くじ売り場にいた。こどもの目には壁のように大きく見える背中を丸めて、くじを**買っていた**。声をかけるとぎょっとした顔で振り向いて、それから、照れくさそうに笑った。（はずれ045）

（56）誰もが、重い空気を背負わされたように猫背になって、その重みに耐えているような目を、膝の上に組んだ両手や足許の床に**落していた**。（白夜を173）

（57）暁はがっかりしたように肩を落として、離れていく花の背中をじっと**見送っていた**。（私の男220）

（58）ドアの外では、王が、どうか自分に免じて、この部屋だけは襲わないでくれと、両手を合わせて満人たちに**頼んでいる**。（赤い月169）

（59）何を言うべきかを思い出そうとして、益垣先生は眉根をよせて、じっと**立っている**。（泥流地167）

（60）タケはカウンターの左隅で、口を尖らせてCDのケースを**弄んでいる**。ときどき、腹に据えかえねたように溜息をつく。（猫の息003）

これらに比べて、シテが身体部分の単なる結果状態を表す例（43）～（50）のように修飾や文脈がない場合は、内的側面の表現性は相対的に薄いかもしれない。しかしその場合でも、心理的なものの含みが全くないとは言えない。例えば例（43）の生真面目さ、例（46）の無関心さ（のよそおい）、例（48）の驚き、例（50）の真剣さのように。特に顔やその部分の場合、テクストの流れの中で主体の内面に関する含みが読み取れない例はほとんどないように思われる。

3.3.3. その他注意すべき場合

ここまでの例（43）～（60）は定形動詞が意志的な出来事の場合だが、非意志的な動作・結果状態であれば、当然、それに付随する結果状態を表す。

（60）胸の上に片腕をのせて妻は**眠っていた**。（深い河005）

（61）川添が軽く顔を傾けて、首を**吊っていた**。（顔に降195）

身体部分が主要な動作の対象と加わっている場合（3.2.4節）と異なって、身体部分の結果状態が付随的である場合は、主要な動作の対象としての関わりも考えにくい。次のような例はデ格名詞で言い換えることができるが、このような場合は動作に加わる対象としての道具ではなく、規定語による修飾をともなった様態規定のデ格名詞であろう。

（62）腐野さんはなぜだか、哀れむように目をほそめて（哀れむようにほそめた目で）僕を**見上げていた**のだった。（私の男159）

（63）隣に坐っている増矢武志は、口をかすかにあけて（かすかにあけた口で）、軽いいびきを**かいていた**。（優駿168）

ここまでの例ではまだ二つの外的な出来事の関係が認められるが、一歩進めて、定形動詞が内面的な感情や思考を表す次のような場合は、もはや二つの具体的で外面的な動作どうしの関係は考えられない。奥田（1989）は、このように定形動詞が表す心理活動の側面としてシテが表情やみぶりを差し出す場合を「動作の特徴づけ」の箇所で扱っている。

（64）着いてみると、何のことはない。リツ子は久しぶりに太郎と私を見て有頂天に喜んだが、
「どうかした？　電報など」
と云うと、不審そうに眼を丸くして**驚いている**。（リツ子008）

（65）片頬をゆがませてなにごとか**考えていた**。（私の男237）

このほか「顔（頬、耳）を赤らめる、目を濁らせる（曇らせる）、まぶたを腫らす、瞳をうるませる」などの再帰構造や、「青ざめる、赤面する」などの自動詞には、もはや主体の意志的な動作としての側面はない。純粋に内的な側面の反映としての非意志的な変化であり、「赤くなる、濁る、曇る、腫れる、うるむ」のような「もの」の非意志的な変化を表す主体変化動詞と近づいている。当然、これらの動詞がシテであっても結果状態の意図的準備性はありえない。

4. まとめ

本節では、ここまでの分析を整理したうえで（4.1 節）、シテの機能面の考察を行ない（4.2 節）、今後の課題を述べる（4.3節）。

4.1. 分析の整理

3節で取り出したタイプと、その特徴と例文を整理する。番号は本文の節番号と対応させる。

	構文的特徴・動詞のタイプ	例文・動詞の例
3.2. 意図的に準備された主体の結果状態	定形動詞のアスペクトによって動作の先行性が前面化する	・彼は畳に座って本を**読んでいた**。［継続相］ 彼は畳に座って本を**読んだ**。［完成相］
3.2.1. 動作の姿勢	動詞：姿勢変化動詞 ①ニ格がなくてもよい ②ニ格があってもデ格は不可	立つ、座る（腰を下ろす）、もたれる、ふりむく ・彼は座って本を**読んでいた**。 ・彼は畳に座って（*畳で）本を**読んでいた**。
3.2.2. 動作の姿勢・場所	動詞：ニ格をとる姿勢変化動詞 ①ニ格があり、デ格でも可 ②ニ格→デ格も可	立つ、座る（腰を下ろす）、寝る ・彼は縁側に座って（縁側で）本を**読んでいた**。 ・彼は縁側で座って本を**読んでいた**。
3.2.3. 動作の場所	動詞：位置変化動詞 ①ニ格があり、デ格でも可 ②ニ格→デ格は不可	行く、来る、出る、入る、戻る、帰る ・彼は縁側に出て（縁側で）本を**読んでいた**。 ・彼は*縁側で出て本を**読んでいた**。
3.2.4. 身体部分＝主要な動作の対象	動詞：姿勢変化動詞（再帰構造） ①身体部分＝主要な動作の対象 ②内的側面の修飾・文脈、フレーズ性なし	・彼は腰を曲げて（腰に）湿布を**貼っていた**。 ・彼は指を伸ばして（指で）窓を**こすっていた**。
3.3. 付随的な主体の結果状態	定形動詞のアスペクトによって動作の先行性が前面化しない	・彼は口を開けて本を**読んでいた**。［継続相］ 彼は口を開けて本を**読んだ**。［完成相］
3.3.1. 身体部分の単なる結果状態	姿勢変化動詞（再帰構造が中心） ①身体部分≠主要な動作の対象 ②内的側面の修飾・文脈、フレーズ性なし	背を曲げる、腕を組む、口を開ける、うつむく ・彼は足を組んで本を**読んでいた**。 ・彼は口を開けて本を**読んでいた**。
3.3.2. 主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態	姿勢変化動詞（再帰構造が中心） ①身体部分≠主要な動作の対象 ②内的側面を表す修飾・文脈、フレーズ性あり	胸を張る、肩を落とす、頬をゆがめる ・彼は肩を落として本を**読んでいた**。 ・彼は驚いたように口を開けて本を**読んでいた**。

上記のタイプ間の関係（共通点・相違点）をまとめると、次のようになる。

①3.2.1 と 3.2.2 は主要な動作のための姿勢を表す点で共通。ニ格名詞との結合の有無・デ格名詞による言い換えの可否で異なる。
②3.2.2 と 3.2.3 はニ格名詞との結合によって主要な動作のための場所を表す点で共通。動詞のタイプと連動して、ニ格名詞との結合が3.2.2（姿勢変化動詞）では任意、3.3.3（位置変化動詞）では基本的に必須であるという点で異なる。
③3.2.1、3.2.2 と 3.2.4 は再帰構造が用いられる点で共通。ただし前者は「腰を下ろす、身を起こす」などの主体全体の姿勢に関わるものに限定される。
④3.2.4 と 3.3 は再帰構造が用いられる点で共通。3.2.4 では身体部分は主要な働きかけの対象（の全部・一部）として定形動詞への格関係が考えられるが、3.3ではそうではない。
⑤3.3.2 では、フレーズ化や、修飾や文脈をともなうことで、内的側面の表現としての身体部分に移行している。それが相対的に明らかでない3.3.1 は、中間的な場合である。

重要であるのは、同じ姿勢変化動詞でも、動詞のタイプや定形動詞との関係によって異なった関係的意味が連続的に存在するということである。動詞のタイプと関係的意味の対応が相対的に明確な場合もあるが、再帰構造が中心に用いられる 3.2.4 や 3.3 の場合は主要な動作との関係や、主体の内的側面を明らかにする修飾や文脈まで考慮しなければタイプを規定しがたい。

次に、姿勢変化動詞と、森田（2015）が分析した主体動作客体変化動詞の関係を述べる。主体動作客体変化動詞は、基本的に意図的に準備された客体の結果状態を表し、定形動詞のアスペクトによってシテが表す動作の先行性が前面化する。この点で主体変化動詞である姿勢変化動詞が意図的に準備された主体の結果状態を表す場合（3.2）と共通する。しかし、主体動作客体変化動詞では定形動詞のアスペクトによる違いが相対的に明らかであるのに対し、姿勢変化動詞では、意図的に準備されたものではない付随的な結果状態を表し、主体の動作の先行性が前面化しない場合（3.3）もあり、相対的に複雑である。また、姿勢変化動詞のうち再帰構造の場合は、主体動作客体変化動詞が用いられている点で共通する。「腰を下ろす」のような場合（3.2.1、3.2.2）は典型的な再帰構造であるが、客体としての「もの」への働きかけに近い場合（3.2.4「腰を<u>折って</u>湿布を**貼る**」に対して「紙を<u>折って</u>シールを**貼る**」）もある。一方で「肩を落とす」のような付随的な結果状態の場合（3.3）は意図的準備性がない点で、典型的に「もの」への働きかけを表す主体動作客体変化動詞の場合と異なる。

4.2. シテの動詞述語としての機能

ここまでシテが姿勢変化動詞である場合について、意図的に準備された主体の結果状態を表す場合から、付随的な主体の結果状態を表す場合まで、関係的意味の連続的なあり方を中心に分析してきた。以下、一歩進めて、シテの動詞述語らしさという機能的観点から考察を加える。

まず、シテが意図的に準備された主体の結果状態を表す場合、アスペクトの異なりによって動作の先行性が容易に認められる点で、シテには動詞述語らしさが残っている。一方、動作の先行性がはっきりしない付随的な主体の結果状態の場合は、一つの動作というより、もっぱら主要な動作を行なう身体の部分における結果状態を表すことで、シテの機能は述語から修飾語へと移行しつつある。特に内的側面の現れとしての身体部分の結果状態を表す場合は、動作の意志性を薄れさせながら、具体的・外見的なものからの抽象化が進み、二つの動作の関係から主要な出来事とその側面描写の関係へ移行しつつある（ただし、シテが全く内面的なものの表現に移行しきっているわけではない）。このような意味での状態規定的な修飾語的機能に限定すれば、シテが副詞的意味・機能を持つようになっていると言える。

しかし、姿勢変化動詞や位置変化動詞が「動作の場所」を表す場合は、厳密な意味では修飾語（副詞）的であるとは言えない。「述語と主語（補語、修飾語）からなる事象全体をとりまく外的状況を表す（工藤2002）」という状況語的機能をも持っているからである。

このような同一の文法形式の多機能性は、例えば次のようなデ格名詞の意味・機能のあり方を考えてみれば、全く不思議ではない。

・木で土に線を**引く**。　［意味：道具　機能：対象語的］
・正座で／しかめっつらで話を**聞く**。［意味：様態　機能：修飾語的］
・庭で竹刀を**振る**。　［意味：場所　機能：状況語的］
・風邪で学校を**休む**。　［意味：原因　機能：状況語的］

シテと定形動詞との関係にも同じことが言える。本稿が観察した姿勢変化動詞においては、一見、似たような意味（主体の身体の外見的様態）が表されているようであっても、その機能は名詞デ格と同様、多様である。また位置変化動詞の場合は、「動作の場所」を表すという状況語意味・機能をとらえなければ、機能的な側面の記述がしがたい。

・正座をして／顔をしかめて話を**聞く**。　［意味：様態　機能：修飾語的］
・庭に立って竹刀を**振る**。　［意味：場所・様態　機能：修飾語・状況語的］
・庭に出て竹刀を**振る**。　［意味：場所　機能：状況語的］

シテの、動詞としての特質は次のような点である。第一に、同じ状態を差し出しているようであっても、シテが表すのはあくまで動作の結果状態である点（「正座をして話を**聞く**」と「正座で話を**聞く**」の違い）。出来事間の時間的関係も、動詞述語としてのアスペクト性に基づいたものである。そうでなければ「中腰で」に対して「中腰になって」のような形式的な動詞を用いた表現の特性の把握は難しいだろう。第二に、動詞として他の従属的要素を従えるという構文論的性質を通じて、シテを含む部分全体が、主要な出来事に対しての副次的な意味・機能を示す点（「庭に立って竹刀を**振る**」と「庭で竹刀を**振る**」の違い）。第三に、文の任意的な成分としての修飾語・状況語的機能は、文の叙述を終えるのではなく続け、他の主要な述語に従属するという特性を持つ「中止形」であることを通じて生じるものであるという点。言い換えれば、文末にあって文の叙述の中核になるという典型的な述語機能が、他の主要な述語に対して従属的な形式をとることで変容し、副次的な機能を持つということである。

4.3. 今後の課題

奥田（1989）では「ふるまい状態」と「ふるまい動作」は、先行する動作の結果状態に基づく「複合」性を共通の意味特徴とした時間的関係のバリエーションであったが、このような異なりが生じる条件については明確にされていなかった。そこで本稿は、アスペクトが出来事の時間的関係を表し分けるという工藤（1995）の考え方に基づいて、定形動詞のアスペクトを主要な文法的条件として記述した。また奥田（1989）が取り出した「動作の場所」という関係的意味については、場所のデ格名詞による言い換えを条件として明示し、姿勢変化動詞と位置変化動詞の共通点と相違点を示した。さらに付随的な身体部分の結果状態について、定形動詞のアスペクトによって動作の先行性が前面化しにくいことを挙げ、主体の内的な側面の表現への移行を示すことで、「動作の特徴づけ」にいたる連続相を記述した。

一方で、奥田（1995）の「複合」のような総合的カテゴリーの、筆者なりの検討は今後の課題である。「彼は籠を背負って（ジャージを着て）、畑を**耕していた**」のような他のタイプの主体変化動詞の記述が、次の課題である。また、奥田（1995）では副詞化の進んだ「動作の特徴づけ」の場合について「ふたつの動作のあいだでは時間的な関係というものがもはや考えられない（同：29）」と述べているが、この点も検証しきれていない。次のように定形動詞のアスペクトによって時間的関係に違いのない、他のタイプの動詞の分析を通じて明らかにしたい。

・彼は腕を振り回して**歌った（歌っていた）**。　［主体動作動詞・身体部分における動作］
・彼は這って庭に**出た（出ていた）**。　［主体動作動詞・移動の様態］
・彼はボールを投げて**遊んだ（遊んでいた）**。　［主体動作動詞・主要な動作の方法］

・彼は大きな声を上げて**泣いた（泣いていた）**。［動作の抽象的側面］

注

1）用例の末尾に出典がないものは作例であるか、実例の一部を言い換えたものである。

2）この観点は、客体における変化（とその結果状態）を表す主体動作客体変化動詞との関係を明らかにするうえでも重要であると考えている。

3）仁田（1995）は「姿勢変化そのものに焦点を当てて理解するか、変化後の状態維持に力点を置くか」で「付帯状態」「継起」のどちらにも解釈されるとし、「〈動きの取り掛かり方〉を表す副詞」や三つ以上の出来事の連鎖を「継起」と解釈される条件として挙げるが、定形動詞のアスペクトに比べると二次的な条件であろう。例えば「男は椅子に座って、目を閉じて音楽を**聞いていた**」は三つの出来事の連鎖だが、継起的ではない。なお成田（1983）も同様に、副詞的用法と継起的用法の異なりを述べる一方で、副詞的用法は「継起的な意味も内包しているとみなすことができる（同：140-141）」、「「様態動詞」も継起的用法に用いられることがある（同：157、注5）」と述べている。

4）「あぐらをかく、尻餅をつく、頬杖をつく、腕組みをする」といったものはリストに示していないが、姿勢変化動詞と同様に扱う。

5）「いす、ベンチ、テーブル、デスク、ベッド、こたつ」などの人がその上で活動することを前提とする器具の場合はデ格名詞への言い換えができ、動作の場所を表すと言える場合が多い。

・岳の部屋にそれとないそぶりで行ってみると、彼はベッドに寝ころがって（ベッドで）、やはり思ったとおり釣りの本を**読んでいた**。（岳物語006）

・彼女は眠らずに台所のテーブルに座って（台所のテーブルで）僕を**待っていた**。（ねじま119）

また、次のようにカラ格名詞で言い換えられる場合があるが、この場合は主体のいる場所ではなく、方向性のある動作の起点・経路となる具体物である。

・太郎は茶の間の先の海の見える川ふちの手すりに寄って（茶の間の先の海の見える川ふちの手すりから）、何かしきりに潮の中へ**投げこんでいた**。（リツ子009）

・禮子は木戸にはりついて（木戸から）、なかを**うかがっている**。（あ・う030）

6）「乗る、のぼる、あがる、落ちる」といった動詞は、くっつき先のニ格名詞をとる点では姿勢変化動詞だが、姿勢（身体の向き・様態）を表すのではなくニ格名詞なしでは用いにくい点では位置変化動詞らしい。

・玄海丸の屋根に匍い上って、一人、白昼の海の青をむさぼるように**見つめている**。（リツ子そ004）

また「隠れる」はニ格名詞がくっつき先ではなくゆくさきを表す点では位置変化動詞だが、「物置に（物置で）隠れて煙草を**吸っていた**」のようにニ格名詞をデ格名詞にしてもよい。しかしこれは姿勢ではなく態度的な意味が含まれているからであろう。

7）姿勢変化動詞が典型的な場所を表すニ格名詞をともなう場合も見られたが、多分に修辞的な例である。

・富岡は、雨の街に立って、並樹の美しい、昔の東宮御所の方を**眺めていた**。（浮雲024）

8）移動動詞を分析した李（2009）は複文を対象とした第4章でシテによる実例を整理して記述している。

9）ただし動作の様態の修飾がある場合は動作性が明らかである（定形動詞が完成相の例）。

・薄い唇をゆっくり開いて、しゃがれた声で**つぶやく**。（私の男065）

・千造の問いに、久美子はぺろっと舌を出して恥しそうに**笑った**。（優駿056）

用例出典

本稿中の用例として挙げたもののみ、単行本の刊行年（短編は初出年）順に挙げる。

三島由紀夫（1946）「煙草」『真夏の死』新潮文庫（1970）／檀一雄（1950）『リツ子・その愛』『リツ子・その死』新潮文庫（1950）／川端康成（1951）『舞姫』新潮文庫（1954）／林芙美子（1951）『浮雲』新潮文庫（2003）／三島由紀夫（1951）「離宮の松」『真夏の死』新潮文庫（1970）／川端康成（1954）『山の音』新潮文庫（1957）／円地文子（1956）『朱を奪うもの』新潮文庫（1963）／三島由紀夫（1957）「橋づくし」『花ざかりの森・憂国』新潮文庫（1968）／井上靖（1964）『夏草冬濤（上・下）』新潮文庫（1989）／遠藤周作（1965）『留学』新潮文庫（1968）／井伏鱒二（1966）『黒い雨』新潮文庫（1970）／三浦綾子（1977）『泥流地帯』新潮文庫（1982）／三浦綾子（1979）『続・泥流地帯』（1982）新潮文庫／向田邦子（1981）『あ・うん』文春文庫（1983）／三浦哲郎（1984）『白夜を旅する人々』新潮文庫（1989）／椎名誠（1985）『岳物語』集英社文庫（1989）／宮本輝（1986）『優駿（上）』新潮文庫（1989）／花村萬月（1990）『眠り猫』新潮文庫（2004）／桐野夏生（1993）『顔に降りかかる雨』講談社文庫（1996）／遠藤周作（1993）『深い河』講談社文庫（1996）／花村萬月（1994）『猫の息子―眠り猫Ⅱ―』新潮文庫（2004）／村上春樹（1994）『ねじまき鳥クロニクル第１部　泥棒かささぎ編』新潮文庫（1997）／浅田次郎（1997）「遺影」『霞町物語』講談社文庫（2000）／浅田次郎（1998）「すいばれ」『霞町物語』講談社文庫（2000）／重松清（2000）「はずれくじ」『ビタミンＦ』新潮文庫（2003）／なかにし礼（2001）『赤い月（上）』新潮文庫（2003）／村上春樹（2005）「ハナレイ・ベイ」『東京奇譚集』新潮文庫（2007）／三浦しをん（2006）『まほろ駅前多田便利軒』文春文庫（2006）／桜庭一樹（2007）『私の男』文春文庫（2010）

参考文献

内丸裕佳子（2006）「動詞のテ形を伴う節の統語構造について―付加構造と等位構造との対立を中心に―」『日本語の研究』2-1，pp.1-15，日本語学会.

遠藤裕子（1982）「接続助詞「て」の用法と意味」『音声・言語の研究』2，pp.51-63，東京外国語大学音声学研究室.

奥田靖雄（1984）「連用、終止、連体…」『ことばの研究・序説』pp.53-66，むぎ書房.（初出は布村政雄（1975）『宮城教育大学国語国文』6，pp.22-30，宮城教育大学国語国文学会.）

――――（1989）「なかどめ―動詞の第二なかどめのばあい―」『ことばの科学』2，pp.11-47，むぎ書房.

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房.

――――（2000）「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法２　時・否定と取り立て』pp.93-150，岩波書店.

――――（2002）「日本語の文の成分」『現代日本語講座　第５巻　文法』pp.101-119，明治書院.

言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房.

蔡季汝（2007）「再帰使役文について」『明道日本語教育』1，pp.91-120，明道大学.

高橋太郎（2003）「第８章　動詞が述語でなくなるとき」『動詞九章』pp.221-257，ひつじ書房.

成田徹男（1983）「動詞の「て」形の副詞的用法―「様態動詞」を中心に―」渡辺実（編）『副用語の研究』pp.137-158，明治書院.

仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』pp.87-126，くろしお出版.

益岡隆志（2014）「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田

直子・丸山岳彦（編）『日本語複文構文の研究』pp.521-542，ひつじ書房.
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.
――――（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
三原健一（2011）「テ形節の意味類型」『日本語・日本文化研究』21，pp.1-15，大阪大学日本語日本文化教育センター.
森田耕平（2015）「動詞の第二中止形が表す意味―アスペクトと動詞のタイプに注目して―」『阪大日本語研究』27，pp.83-108，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
吉田妙子（2012）『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房.
吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
李善姫（2009）『日本語の移動動詞の研究』東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士論文.

（博士後期課程学生）
（2015年8月19日受付）
（2015年9月30日修正版受付）
（2015年10月18日再修正版受付）
（2015年10月19日掲載決定）